

仏様のおはなし新シリーズ第84集 「とある女性の告白」

私が京都で学んでいた二年前のとある金曜日の夜、京都駅から明石行きの新快速列車に乗りました。中には会社帰りのお方々が多数。

私は当時愛読していた歎異抄の解説書を読みながら、一時間ほどの道程を過ごそうと思いましたが、しかし恥ずかしながら睡魔に襲われ、いつの間にか本を広げたまま眠ってしまったようです。

すると、
「あの、すみません。突然ですみませんが…」
パツと目を覚ますと、二人掛けシートの隣に座った四十歳前後の見知らぬスーツ姿の〇さんが私の顔を下からのぞき込んでおられました。私は「は？」と素っ頓狂な声で驚くと、

「いや、あの貴方の読んでいるその本。すごく面白そうで」
と仰るのです。訳が分からないまま話を聞くと、その女性はこれまで二十年近く、哲学を勉強して来られたというのです。おそらく歎異抄の内容に目が奪われたのでしょうか。女性はこう続けます。

「…でも、私が愛し、学んできた哲学の知識は、会社という組織では一切必要とされなかった。私はそれが苦痛で、自分が日々こなしている仕事と頭の中の思想がどんどん乖離していつ、それに耐えられなくなって。病んじやったのよね。だから一回休職したんだけど。最近また復帰したの。もう割り切ろうと思つて」と。そして

「私達は、一人一人本当にちっぽけな存在で、この大きな宇宙の中で塵のようなものではないのね。ホント、人生の99%は苦しいのよ。」

彼女の悲痛な心の叫びでした。どこにでも居られそう〇〇の方からこんな言葉が出てくるとは正直驚きでした。「人生は苦しい」「まきにお釈迦様が仰つた「一切皆苦」であります。しかし同時に気になったのが「私達はちっぽけな塵のような存在」という彼女の言葉です。

果たしてそうなのでしょうか。いや、そうだとすると、それで終わつてしまつて良いのでしょうか。阿弥陀如来という仏様は、私達一人一人の命を「仏となる尊い命」と見つめてくださいました。「南無阿弥陀仏」という願いが私達に間違いなく至り届いているということ、そしてその共に歩んでくださる仏様がおられるからこそ、いし、かわら、つづてのごとき私達は、この娑婆という孤独そして苦悩に満ちた迷いの世界を力強く歩んでいけるのではないのでしょうか。靴にしまい込んだお聖教を開く前に、彼女は「ありがとう」という言葉を最後に、電車を降りて行つてしまいました。二年経つた今も、彼女との不思議な出会いが、私の心の底にありありと焼き付いています。

